日露戦役従軍日誌にみる戦闘の模様

元新発田駐屯地援護室　佐藤　和敏

【第六回】は、明治３８年、奉天の会戦です。

三月一日晴天、午前五時二十分集合終り、第十六聯隊は、軍の予備として楊城塞を出発

七時、前方には猛烈なる銃砲声あり、八家子に到着。命を待ちて午後七時ワイトウ山付近に露営せり。行程七里。

二日曇天、七時五十分前日の位置に集合し命令を待ち、十時より風吹き来り降雪。尚砲声盛んなり。午後六時露営地に帰り露営す。其の夜各人に付き、玉子一個・餅二個宛て下給せらる。同夜十一時命令により出発、近衛師団に属し西清に着く。命を待ち同夜ワイトウ山西谷に潜めり。

三日晴天、午前二時盛んに銃声あり、六時名無し村落に着し、午後七時出発、其日弾薬補充として石川少尉の指揮に従い戦線に運ぶその時、第四分隊、渋谷信次、敵弾のため負傷す。七時同地を出発し四家子に着し、尚夜は敵襲撃のため二回防御線に着したるも射撃せず。当夜森井清次、名誉の戦死す。

四日晴天、午前二時敵逆襲し来りしも是を撃退す。七時本防御線を引き上げ某地に至る尚砲撃すること甚だし、土壁の元に依り命令を待ち午後九時出発、前方の鉢巻山を攻撃。第二大隊の全部、近衛及び第一大隊の一中隊・第九中隊、聯隊は聯隊長の指揮のもとに有り。

同五日晴天、払暁に占領す。当夜午後十時敵は逆襲し来り、第九中隊・第十一中隊は、鉢巻山守備の任にて、二・三回の逆襲し来りしも撃退す。当夜敵は、前面の山に電気を燈し我が軍の前進を山頂より見、攻勢を取りたる。然れども我が軍の突撃に恐れて退却す。

三月六日晴天、午前一時より工作。近衛工兵と共に大工事せり。六時敵襲にして一戦を交えしも退却いたし、直ぐに工作す。六時半引き上げ同地において休憩す。当日は冷風烈しく日中といえども砲銃声止まらず、今回の戦闘も困難一言に方なし。数日飯を炊くことたがわず。

午後二時より左翼第四軍の方向に烈しき砲声せり、同六時より我が隊に向かって猛烈なる砲撃せり。当夜は近衛の線に突撃し来るに、早我が線に来りて防御線に押し入り我等は土袋を積んでこれに依り第九・第十中隊は是に射撃せり。近衛工兵は、手投げ榴弾〇爆裂

弾〇機関砲を以て敵に損害を与え、ついにその敵を撃退す。敵味方の死傷者多大なり。尚二・三回の逆襲し来るも撃退す。
　彼の勇猛なること、日本兵に同じ。当夜は僅かの炭を支給され初めて飯を炊く。そのとき水を出発以来初めて飲む。

　七日晴れ、午前四時弾薬補充として鉢巻山に補充す。終わりて食事をなし、休憩して午後一時、我が昨日迄戦えし敵兵、前方の高地に赤十字を立て、六時まで休戦を乞う。

　我が軍もこれに応ず。彼我ともに射撃は直ちに止まり、我が軍よりも第十二中隊長、山本大尉、敵の軍督互いに我が占領せし鉢巻山左の高地に出会い、手に手を握りに祭奮を催し、四方山の談話に及びその時彼我の衛生隊は出て、死傷者を収容し、敵はこれにありて不肖煙草を乞う。写真師来りてその景況を写す。実に文明の戦闘なりと感じたり。

　午後四時四十分、互いに再会を約して別れる。いずれも防御線に就き、時間も過ぎ六時十分に至りても敵発射せず、不審に思いおりしに午後八時四分に放火し、ことごとく皆退却せり。

　三月八日晴天、寒さ甚だしく霜降り、当第九中隊は午前一時、当地を出発某村に至り露営す。午前八時総追撃に移り出発、午後二時より聯隊は、谷山支隊となり五洞嶺を占領す。以て師団の北進を容易ならしむ。当夜十一時ころ一時間の休憩にて其の内に炊き終わりて再び前進す。その地において本隊に加す。

　九日曇天、午前七時某地に着きし命を待ち午後十二時ころ大小地へ着し、余りは潜伏斥候となり。当夜我が前面は種々に大火を見る。翌日十日、午前二時第十中隊と交代し、後方に在して露営す。

　十日晴天、午前四時露営地出発、渾河を渡り富布街東北方高地を攻撃にて、第十二中隊の一個小隊は同地を占領す。烈するに敵は半年間も掛けり防御工作をめぐらし置きたればそこに在して射撃すること甚だしく、我が隊に向かって襲撃し来り。第十二中隊の一小隊は退却に及ばんとす。よって第九中隊は応援として向かえしに、敵は非常に射撃を以て、我に向かう為に我が中隊長及び波多少尉戦死す。若松・石川の両少尉は負傷、特務曹長も又負傷す。中隊に一人の将校もなく、曹長自ら中隊を指揮す。その日、谷山聯隊長は右腕貫通されながら聯隊を指揮す。敵は尚前方の高地にありて、弾薬補充して我に射撃す。然れども我が中隊は、親の敵と一心になり敵と射撃を交換し、ついにその敵は退却す。

　我が軍は得たりと喜び、着々射撃を加え、多大の損害を伴いこれより第十二中隊の指揮に従い約二里行軍し、午後十一時、古家子に宿営す。其の戦闘で我が分隊に、分隊長とも三名負傷す。我が中隊に、中隊長以下死傷四十九名あり。当日奉天占領す。

十一日晴天、補充として、齋藤大尉、山口中尉、鈴木特務曹長、第九中隊附きとなり、午前六時整列、其の村において昼食す。

この後も聯隊は多大の損害を受け、三月十五日鉄嶺占領。宿営に着く際中隊長より「楊城塞を出発し二週間余、原野に伏し雨に打たれ満州風にさらされ、第一は厳寒にて眠ることたがわず、しかれも皆国家のためと思い勇気をふるい遂に敵を撃退したりと言えり」との訓示をしています。

以上奉天会戦の紹介でした。尚、氏の射撃の腕前は、中隊競点射撃において十五番の成績を取った腕前と記されています。